

氏 名	楊 啓 樵 ヨウ ケイ ショウ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 149 号
学位授与の日付	昭 和 56 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	雍正帝及其硃批論旨研究（雍正帝と硃批論旨の研究）

論文調査委員 (主 査)
教 授 島 田 虔 次 教 授 萩 原 淳 平 教 授 谷 川 道 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は清朝第三代の皇帝雍正帝胤禛についての政治史的研究であり、引言と結語とを除いて、次の10章より成る（原漢文）。

1. 清初における族権と皇権との消長
2. 胤禛の人と事蹟
3. 胤禛篡奪説の検討
4. 胤禛と年羹堯との恩怨関係の葛藤
5. 雍正初年の政局
6. 密摺政治の由来とその内容
7. 硃批論旨の分析
8. 硃批論旨はなぜ改竄せられたか
9. 硃批論旨はいかに改竄せられたか
10. 胤禛急死の謎

まず引言においては、康熙・乾隆という大皇帝の間にはさまった雍正帝の治世は、期間もわずか13年間で、表面的には甚だ見栄えがしないが、中国の皇帝政治の歴史において独裁主義を極点にまでおし進め完成せしめたものとして重要な意味をもつ、と宮崎市定博士の見解を継承することを明言し、その資料としては、台湾故宫博物院所蔵の未公開硃批論旨を活用するものであると説く。

第一章。宋以来、特に明代に強化された君主権は清朝に入って、はじめは満州民族的宗族政体による制約が強かったが、天子はそれに抵抗し、やがて中国的天子独裁制の伝統が回復されるとして、その過程をスケッチする。

第二章。その政治を理解する前提として雍正帝の極めて複雑な人間的資質・性格が分析され、描写される。

第三章。清朝政治史の一大疑案たる雍正帝即位の事情について、今日殆んど定説とされている篡奪説

(朝鮮史料にもとづく説、孟森説、王鍾翰説)をあらゆる角度から批判して、康熙・雍正間の授受はむしろ合法的であったと解すべきならん、と説く。

第四章。篡奪云々と関連して年羹堯事件を論ずる。すなわち、はじめ重用せられた年が死を賜わるのは篡奪にかかわった年の口封じの爲め、とする通説を批判して、その賜死は年が驕横となり帝の秘密情報網を破壊したことによると論証し、且つ、年の正確な年齢(帝より一歳年少)を発見することに依って、年と帝との間に呂不韋・秦始皇帝の関係ありとする野史の説を否定する。

第五章。雍正帝の各種の政治改革の歴史的必然性を説く。

第六―九章は、雍正帝および雍正時代史研究の根本資料たる硃批諭旨(臣僚よりの密奏に書き込まれた帝の評言や指令)そのものについて詳論する。硃批諭旨には約八千余通を収録する乾隆三年の刊本(雍正帝自身が公刊を準備して果さなかったもの)があり、従来は専らこの刊本によって研究が行なわれてきたが、実は台北にはその約三倍の量の硃批諭旨が現存する。著者は三回にわたってそれを親しく調査し、刊本に未収録のものの資料価値はもとより、収録されたものにあっても雍正帝自身の書き改めによって原文書と非常な差違のあるものの少なからず存することを発見し、何故に改竄が行なわれたか、その改竄の手法は如何、さらに又、受領者と帝以外には絶対秘密とあれほど強調していた帝が、なぜ在世中に公刊を決意したのか、などの諸問題のほか、雍正帝の硃批が康熙帝のそれとどの点で異なるか、密奏と硃批諭旨を通じて見た正雍政治の一斑、などをいちいち豊富さわる例証をあげて論じ、付録として、提奏人とその奏摺件数との一覧表を作成している。その出版の目的としては、清初諸帝の議論愛好、曾靜事件の刺激、自己の死後の評価を確立せんとしたこと、の三点をあげるが、特に文面の改竄については鄂爾泰、高其倬その他の例をあげて詳論している。

第十章。野史などに根づよい帝の急死を刺客による殺害とする説を批判し、その死は長生のための丹薬服用の中毒によるものと推定する。

なお、未公開硃批諭旨は1977年より台北故宫博物院から刊行が開始されたが、その校訂について著者は不満をのべている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、(1)雍正帝胤禛の史実を論じた政治史的部分(第一、二、三、四、十章)と(2)史料としての硃批諭旨、特に未発表硃批諭旨を論じた史料学的部分(第五、六、七、八、九章)とに分れる。

(1)の部分。孟森以来の雍正帝篡奪説に対して懐疑的な態度をとるのは最近の一般的傾向といえるが、本論文は更に一步進めて真向から篡奪説を批判しており、その批判はおおむね首肯しうるものである。また年羹堯誅殺事件の原因について、いわゆる減口説を否定したことは当然としても、真因の一として自分がたのみとした秘密情報網が有効に作動しなかったことへの帝のいらだちを指摘したのは鋭い。また、常に問題となる年の年齢を朝鮮文献によって雍正帝よりも一歳年下と確定したこともメリットである。然し最大のメリットは、未発表硃批諭旨を盛んに用いて雍正帝の人物像を再構成し、描写した点であろう。社会経済史万能の戦後の我国の歴史学からは白眼視されるかも知れないが、歴史学本来の性質からいって、かかる研究には充分の存在理由がある。そして本論文のこの部分は、そのようなものとして、上乘の作と評

価できるのである。

(2)の部分については、硃批論旨の文書学的解説 そのものよりも、原本硃批論旨と既刊のそれとの差異(つまり帝自身による改竄のあと)、おびただしく保存されている未発表硃批論旨、に着目し、それらを駆使して種々の新事実を発掘したことの方に大きな意味がある。公刊(雍正帝の死によって実際の公刊は乾隆帝の手にもち越されたが)に際して硃批論旨がいかに大幅に書き改められたかを執拗に追求する過程で、例えば、帝の第一の寵臣で順風満帆の生涯を送ったものとのみ思われていた鄂爾泰が実は必ずしもそうでなかったという事実や、同じく雍正政治史の代表的人物の一人で名臣として喧伝される高其倬がしばしば帝から猜疑の眼を向けられ、民変との関係で譴責せられたりしている事実、などは、それぞれの伝を補うに足るものである。そのほか思想家としても有名な李紱に対するきびしい硃批も、その改訂のあとをたどることに依って、決して憎悪一途から出たものでないことが知られるなど、第八章は殊に史的興趣に富む。

もちろん、本論文が短所を有することは否定できない。既に著者自身が告白しているごとく軍機処、耗羨婦公、郷紳、社会動態などの雍正時代史上の重要問題に触れるところがないのは、本論文の主旨からいってやむを得ないが、著者が取りあげている問題のみに限っても、例えばいわゆる篡奪説の批判においても、定説の論拠の破壊には努めているものの、それに代わる自説の提示があるわけではない。しかし雍正時代研究の基礎史料たる硃批論旨について、いたずらに刊本のみに頼ることの危険を警告し、未発表史料の重要性を強調した本論文の価値は、そのことに依って損われるものではない。

よって本論文は、文学博士の学位論文として価値あるものと認める。